

# 子どもの声の向い方

外村 まき

特定非営利活動法人 チャイルドライン京都 理事長  
浄土真宗本願寺派人権問題啓発委員会委員

昨今の子どもたちがおかれている状況はとて厳しくなっています。子どもたちの自殺は毎日1・4人、虐待死は3日に1人、孤独を感じている子は3人に1人、疲れを感じている高校生10人に8人と総務省の調査結果が出ています。自死、自殺念慮、いじめ、友達との人間関係がとれない子、虐待、貧困、家庭のあり様など、様々な影響から、生きづらい環境におかれています。こうした、子どもたちの声、子どもたちの今をありのままに受けとめる電話、18歳までの子ども専用

電話が「チャイルドライン」です。

「チャイルドライン」を開設し、子どもの声を受けとめることの経験が、子ども声を受けとめることの意味を教えてくださいました。「チャイルドライン」の概

要を紹介しながら、「子どもの声の向い方に何が起こっているのか、子どもの声を聴くことの意味」について一緒に考えたいと思います。

**チャイルドラインとは18歳までの子ども専用電話です。**

1970年代に北欧で始まった子どものためのホットラインの開設が始まります。日本では1998年にイギリスのチャイルドラインをお手本に活動が始まり

ました。世界的には「チャイルドヘルプライン」といわれ、現在、145カ国で取り組まれています。

チャイルドラインは1989年に国連



チャイルドラインを知らせるカード、番号と約束を記載

で採択された国際条約「子どもの権利条約」（日本は1994年に批准）に謳われている精神を基盤に活動を行っている。特に条約の第3条「子どもの最善の利益の保障」を念頭におき、電話というツールを使用した子どもの心に寄り添う活動です。

日本のチャイルドラインは、チャイルドライン支援センターと全国41都道府県にある、72の電話開設団体との協働事業として運営されています。1999年の開設以来、全国でおよそ220万件の電話を受信し、1年間に20万件を超える電話を受信しています。

どのような声が届いているでしょうか、データからみてみましょう。

このように子どもの声が多く寄せられ集積されている子どもの相談事業はこの国唯一のものといえます。チャイルドライン京都でも、協働団体として、2000年に開設し、年間約6000件の子どもたちの声を受けとめ続けています。

全国72団体の実施データです。参考資料2015年チャイルドライン支援センター1年次報告書から抜粋しました。

0%となります。環境と関係ない内容は32.0%で男子が顕著、女子は学校での出来事42.9%となっています。

着信件数20万5832件。通話時間は、1万8686時間、実施時間4万1010時間、稼働率45.6%。平均通話数は、5分27秒です。性別では、男子61.3%、女子34.5%、男子が最多。学年別では、高校生34.8%、小学生17.0%、中学生16.5%と高校生が上位。

誰との関係性か、男女ともに自分53.3%、男子は、友人・知人・親となり、女子は友人・知人となります。事柄については全体で人間関係・雑談・性への関心が上位。男女比では、男子が性に関する興味関心が多く、女子は人間関係が最多です。このような電話がかかっています。

環境については、学校に関すること全体の31.0%、家庭のこと全体の19.0%。

（注）匿名性を尊重し再構成しています。○テストで100点を取ったんだよ、昨日頑

張って勉強していたからよかった。

○今度修学旅行がある、班を決めさせられたけれど、入るところが無くて、先生が残った私ともう一人を二人組のところに入れてくれた。その子たちは意地悪だからとても心配、決まった時も「エゝ嫌だ」と言っていた。同じ部屋になるし、班行動も一緒、とても自信がないので行きたくない。

○誰かと話したい、学校では誰とも話をしない。家に帰っても話をする人がいない。お母さんは仕事で帰りが遅く、帰ってきてても疲れていて話ができないんです。僕なんかいい方がいいのじゃないかと思ってしまう。

○こんなに自分は頑張っているのに何でわかってくれないんだろう。何で学校にこない人の心配をして、こんなに頑張って我慢して学校にきている私のことを心配してくれないんだ。

○私は人と話をするのがヘタだから、私が悪いくれど友だちがいません。話が合わなくて疲れてしまいます。

○友だちがいじめられているんです。いつも大きな声で怒鳴られて、叩かれています。何かしたい、助けてあげたい。でも相手は体も大きくて強いし、何か言ったら私もやられるのじゃないかと不安です。どうしたら助けてあげられますか？

○このような声が届きます。チャイルドラインの特徴はこのような悩みの電話だけでなく「ピアノのレッスンに行ってください。」など日常の些細な思いも届きます。

○子どもたちは「おとなを指示的な存在・脅威的な存在」と考えています。電話の向こうから「どうしたらいいですか？」と指示を求める電話が多いのもこのような思いが強からだと思えます。非常に不安な気持ちを抱きつつも、この一本の電話に期待を寄せて電話してきます。

○私たちは事例から今の社会は子どもの自己肯定感が育ちにくいと捉えています。

「大人から子どもにも適切なコミュニケーションが届いていない。」

○親の共稼ぎ、ひとり親家庭の中で子どもたちは家庭の中でも孤独になってきています。様々な家庭のあり様の中で、子どもに関わる時間の減少、生計を維持する親への配慮、子どもたちも大人に精一杯遠慮して、自分の気持ちを押し殺している様子が伺えます。

「大人から無条件に認められていない。」

○チャイルドラインには、日常の些細な思いや声が届くのも特徴ですが、日常の会話の中で、話したくても心の底から自分の気持ちを話せていない子どもたち、親からの「期待過剰」を一身に受けている子どもたちからも声が届きます。話したくても話せない親子や友だち、先生との関係性が見えると同時に、「いい子」であらねばならないと感じている子ども姿も見えてきます。「いい子」は自分の感情や気持ちを抑えてでも周囲の期待に応じようとし、いつも自分を抑え

ようとすることで内心では不満や不快感を強く感じ、周囲の重要な人に神経を使うため不安感が強くなり、本当の自分を出せないため、周囲の人たちと心からの結びつきをもたず鬱積する状態になります。「いい子」には、自分のありのままの気持ちを素直に話せる場、ありのままに受けとめてくれる場の存在が必要だと考えます。

いじめに関するデータでは、全国で1カ月に1055件〜1717件の着信、月別では、5月〜9月が最多。5月〜7月は新しい学年になり、クラス替えで友だちがいなくなる等の変化が。9月〜11月は夏休みをはさみ、友だちの態度の変化、その他、文化祭や体育祭で冷たくさされている様子の電話がかかります。

学年別には、小学校高学年の女子の件数が圧倒的に多く、年齢が高くなると男子が多いのようになります。いじめられていることを親や先生には言にくいと子どもたちは話します。

関係性では、自分がいじめられている

という電話よりも「友人・知人」が、いじめられているという電話が多いことも驚かされます。

いじめの加害者側、被害者側、傍観者には共通して自己肯定感が低いと捉えています。加害者は、自尊心の低さから怒りや攻撃的な行動が顕著となり、被害者は逆の行動、引き込むという内向的で静かな行動となって現れます。傍観者も、被害者側に立ちつつも行動を起こすことへの不安、全て自尊心が低いことが共通していると考えられます。

いじめをつくらないために子どもが安心できる環境を大人から創り出し、互いを認めあい温かな言葉がけをする人が日常的、継続的に存在する環境を創出しなければならぬのではないのでしょうか。このような環境が維持できれば他人にも優しく接する気持ちが拡がり、いじめの予防につながるのではないのでしょうか。

「多様性が認められにくい中で、差別や子どもの孤立が進んでいる。」

件数は多くはありませんが近年チャイルドラインにかかってくる電話に、外国にルーツを持つ子どもやLGBT（レスビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダー）の子どもからの電話が広がることもありまます。また「勉強」や「スポーツ」について、他の子どもと比較され自分に劣等感を感じていると思われる電話も含まれています。「障害」が背景にある電話もあります。周囲の人の無理解や誤解によって多様性が認められにくい社会の中で、差別が生じ、リスクを抱えています。これらの要因から子どもたちが孤立し、認められず悩んでいます。子どもの切実な思いは国籍やセクシヤリティー、障がいなどに関係なく共通して伝わってきます。

## 子どもの声を受けとめることは

最後にチャイルドラインでは、子どもの声をどのように受けとめ、聴いているかをお伝えします。

まず、「子どもには自己解決能力があるということ」を信じて受けとめることです。そして子どもの今の今に焦点を当てて、子どものペースに合わせて、声の調子、話し方、周囲の状況、あらゆるものから受けとめることと捉えています。

子どもには自己解決能力がないと捉えると、間違っているのだから教えてあげなければならぬ、指示を出してあげないとこの子は大変な状態になるのではないかと。何とかしてあげなければと、子どもの気持ちを聴かずに、問題を解決してあげようと質問を重ねたりします。この傾聴とは全く無縁な態度は、子どもにとって、拒否的と取られ、聴いてもらえなかったという実感は得られません。

私は、子育て中、子どもの気持ちを聴

いていたと錯覚していました。私の聴き方は、自分の聞きたいことだけを聞いていたと気づかされました。

特に事柄にとらわれ、子どもの不安や不満、悲しいこと、嬉しいことなどの気持ちを受けとめられていませんでした。私の関心あることだけを聞き出し、親の答えを一方的に押しつけて、言い論まじして、これで聴いていたと思っていました。私だけでなく多くの大人がそうしているのではないのでしょうか。

チャイルドラインに関わりをもち、子どもの声を受けとめることは、子どもの思い、気持ちをしっかりと受けとめる共感的受容が基本であると捉えています。

私たち大人が日常にできることの一つとして、どんなふうにも話を聴いてもらえたら心が温かくなったのか、子ども時代をふりかえってみることも必要なのではないのでしょうか。

### 外村まき (とのむら まき)

1947 (昭和22) 年生まれ

2000年 京都子どもセンター設立に関わり理事長として就任

2011年 チャイルドライン京都を設立、事務局長に就任

2014年 チャイルドライン京都理事長に就任、現在に至る

京都府人権教育・啓発施策懇話会委員

2012年より浄土真宗本願寺派人権問題啓発委員会委員に就任

